

シリーズ『会長だより：郷土の誇り』(5)大井川上流、家山の「野守の池」悲話

杉本豊久

今からおよそ700年前、京都の建仁寺で修行をしていた若き僧侶。学問に優れ、顔だちもひときわ整ったいい男で、りりしい眉、清く澄んだ目、色白で鼻筋が通り、誰が見てもほれぼれするような青年僧であった。後の名僧、夢窓礎石（夢窓国師）である。礎石が町に托鉢に出ると、都の若い女たちは、ひと目でも礎石の姿を見たいと、それはそれは、大変なさわぎであったという。その中でも、野守大夫という遊女は特別熱心で、「なんて立派なお方でしょう、どんな事をしてもあの方のお嫁さんになりたい」との思いを募らせていたという。この若き二人の悲恋物語の舞台が島田市を流れる大井川の上流、家山の「野守の池」にある。



かつては大井川が流れていた地にできた河跡湖で、川の流れが時の経過とともに変化し、池として残ったものである。川根町家山の中心にある外周 1.2 キロメートルほどの池で、現在では、ヘラブナ釣りの名所として知られている。



近くには野守公園が整備され、自然散策のための遊歩道もあり、春の桜を楽しめる。毎年8月15日には「野守まつり」が開催され、和舟漕ぎ大会、灯籠流し、盆踊り、花火大会など盛りだくさんの行事でにぎわう。



さて、若き礎石を慕い、足しげくお寺に現れる野守大夫にほとんど手を焼いた礎石は、「自分は仏に仕える身、いつまでもこんなことに関わっていては寺に迷惑がかかるし、大切な修行がおろそかになる。」ということで、弟子の了玄を連れて、逃げるように京を離れ、見聞を広げるために国中を旅することにする。

二人は東海道を下って、金谷の宿に着く。美しい流れの大井川を眺めていた礎石は、子どもの頃、甲州の寺に預けられたことがあり、京都に帰る途中、家山に寄った時のことを思い出した。そこには山の緑に囲まれた小さな池があり、土地の人たちは人情に厚く、礎石を温かく迎えてくれたという。二人が家山に着くと、村人たちは昔同様、温かく迎えてくれ、池

の畔に広い境内を持つ立派な海寿山聖福寺を建ててくれた。本堂は間口九間、奥行き七間、それに釣り鐘堂も備えた立派な寺であったという。礎石は大変喜び、毎日寺に籠って一心にお経を唱えて修行をしたという。

ところがある日のこと、聖福寺の門を叩く若い旅の女が現れた。礎石が障子をあけて山門の方を見ると、そこに佇んでいたのは何と！忘れようとしていた野守大夫であった。礎石の心は揺れる。「女の身でよくぞ京からここまで訪ねてきたものだ。さぞ難儀なことであつたであろう。せっかく来たのだから、会ってやりたいが、自分は仏に仕える身である。大事な修行もある。ここは心を鬼にして、居ないことにしよう。」礎石は了玄に対応を指示する。「ここにはあなたの探しているような方はおりません。たとえ礎石様に合うことができても、修行の身であり、僧侶である礎石様はあなたを妻として迎えることはできません。あきらめて京都に戻り幸せに暮らしてください。」と。

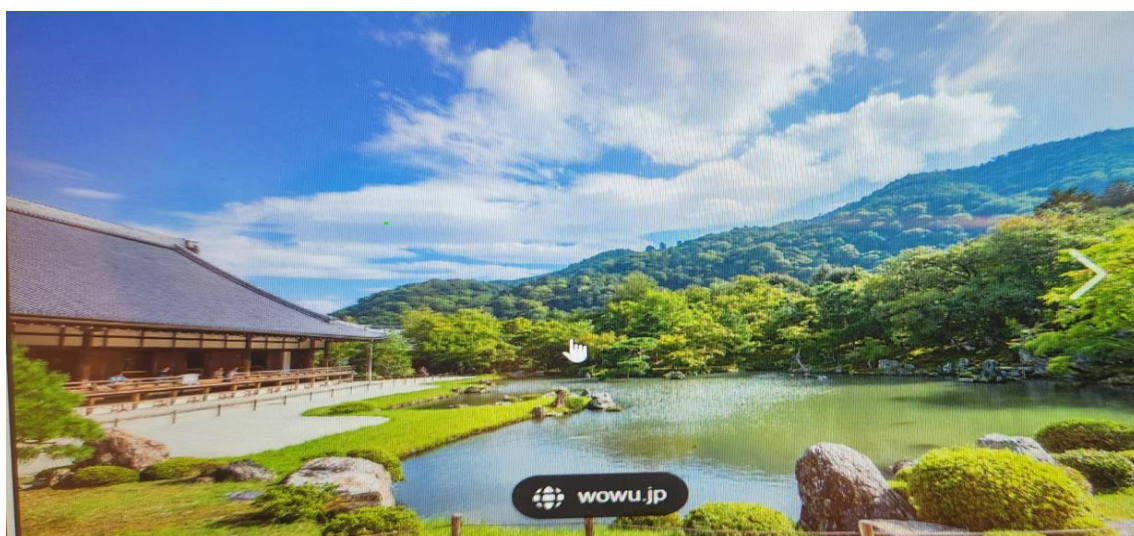


暮れてゆく木立の陰で、懇々と諭す了玄と、涙にくれる野守大夫の哀れな姿をじっと見つめていた礎石は、僧侶の身とはいえ、若き生身の人間として苦しまずにはいられなかったはずであろう。山門をとぼとぼと去っていく野守は、いまさら京都に帰る気力もなく、池の畔を当てもなく歩いていた。月の光が哀れな野守の姿を怪しくも美しく照らしている中、たもとに石を入れ、静かに池に入ってしまったという。あくる朝、野守の死を知った礎石は、「私を慕うがゆえに、尊い命を捨てた哀れな女よ。私は決してお前を嫌いではなかった。許しておくれ、野守よ。」と言って合掌し、野守の亡骸を丁寧に葬ったという。村人たちは、それからこの池を「野守の池」と呼ぶようになった。というのが、島田市観光協会の解説の概要だ。

夢窓礎石（1275 - 1351）は、室町時代初期の臨済宗の禅僧である。後醍醐天皇にその才覚を見出されて、「夢窓国師」の称号を下賜（かし）される。その禅風は、日本の伝統的仏教である天台宗や真言宗との親和性の高い、いわば折衷主義的な試みを行い、幅広い層からの支持を広げた。例えば、後醍醐天皇に続き、武家である足利尊氏・直義兄弟からも崇敬された。『夢中間答集』は、聖と政の第一人者同士といえる初期室町幕府の指導者足利直義と

の対談を記録したものである。

礎石には、禅僧としての業績のほかに、禅庭・枯山水などの作庭家としても非凡な才能を発揮した。世界遺産として登録されている京都の天龍寺庭園（曹源池庭園）、西芳寺（苔寺）などはその好例で、禅の思想と作庭が緊密に結びついている。池や島や建物を禅の公案に見立て、禅の始祖たちのエピソードを身近なものにした。自然を「縮景」というよりは、「心象風景」として表現したといえる。例えば、「心」の字を形どる西芳寺の黄金池をめぐる廻遊式の泉池庭園は、おそらくそうした環境作成的な要素を表している。また、天龍寺庭園も、嵐山・亀山を借景とした池泉回遊式庭園で、最も規模も大きく優美・雄大な代表作である。



さて、その高僧であった礎石も若き修行僧であった頃はまだ未熟で、他の多くの若者と同じく若き血潮と熱情に満ち溢れていて、京都で遊女とのロマンスがあったとしても不思議ではないであろう。僕に言わせれば、この若僧礎石は二つの罪を犯していると思う。その一つは、逃走するように京都を後にする前に、「修行僧として野守大夫を妻として娶ることはできない」ということを説得して、男女関係に終止符を打っておくべきだった。そうすればこんな悲劇は起こらなかったはずだと思うからである。礎石の犯した罪の二つ目は、若き女の身で危険を冒しながら、東海道中あちこちの寺を訪ね歩き、髪は汚れ、顔はやつれて、ようやく家山の聖福寺にたどり着いたときに、礎石は“心を鬼にしつつも”、居留守を使い、嘘をついたことだ。一人の僧侶として、若き女にとはいえ嘘をついて良いものだろうか？また、今でいえば、怖—いストーカーのような行動をとった野守大夫だが、若い娘がこれほどにまでして礎石を追い求めたのは、京都で二人の間に熱烈なロマンスがあったからではなかろうか？などとも“妄想”を抱いてしまうのだ。

この「野守の池」悲恋物語には、こんな逸話もある。野守大夫が家山の少し手前、金谷の大代の里まで来た時、遊女の頃に身ごもった赤子を生んだという。礎石への思いをあきらめきれない野守は、子どもを里の人に託し、家山に向かう。しかし、険しい山道を前に途方に暮れた野守は、わが身を鯉に姿を変え、沢を登り、空を飛び、家山の池に入ったという。



山を越えるときに山頂にあった松の木の枝で背びれを切ってしまい、その松を「鰭（ひれ）切れの松」、鯉が入った池は「野守の池」と呼ばれ、池には今も背びれの切れた鯉が生息しているという。



一方、大代に残された子は、野守が上った沢の水で産湯につかり、病気もせずに健康に育ったという。これから、この沢で遊ぶ子供たちはみな健康に育ったといわれ、「童子沢（わっぱざわ）」と呼ぶようになったという。この子供は、ひょっとして礎石の子供だったのではないか？だとしたら、高僧礎石の末裔がこの地におられることになるかもしれない！などと、はたまた“妄想”を抱いてしまった！（2024.1.21）

